

## ブリヂストン美術館における 図書資料の分類について

中村節子

### はじめに

美術館では、美術作品の収集はもちろんのことであるが、作品研究や展覧会準備のためには、文献資料もまた、なくてはならないものである。しかし、かつては美術作品に比べて、作品関連の資料や研究文献を収集・整理する事は、長い間重要とされてこなかった<sup>1)</sup>。また資料を専門に扱う担当者(司書)もいなかったというのが実状であろう。

近年は、美術情報を提供する場としての美術館の活動が目立ってきている。文献資料については、東京都美術館や横浜美術館の美術図書室、あるいは名古屋の愛知芸術文化センターのアート・ライブラリーのように、設立当初から一般公開の美術図書館として、芸術・美術に関する文献や情報を広く利用者に提供すべく体制が整えられたところはまだ少ない。しかし、『専門情報機関総覧 1994』(専門図書館協議会)や『ライブラリーデータ'93』(教育書籍)などのダイレクトリーによれば、利用やサービスの内容を限定した形で、外部の利用者を受け入れ始めた美術館、博物館の図書室も徐々に増えている。ほとんどのそうした美術図書館が分類に使っているのは、NDC(日本十進分類法)であるだろう。[東京都美術館の美術図書室は1976年の開館当初から独自分類を使用していたが、1995年に開館予定の東京都現代美術館に移管するにあたり、分類法は、美術については部分的に独自の分類番号を設けるが、基本的にはNDC新訂8版に準ずることが決まっている。]

NDCは日本の標準分類法である。その普及率は、公共図書館99%、大学図書館75%、短大・高専図書館99%(1981年 日本図書館協会)、専門図書館64%(1987年専門図書館協議会)であり、「少なくとも日本で刊行されたすべての図書を網羅する全国書誌を適正に分類することが、標準分類表の責務」<sup>2)</sup>と考えられている。日本図書館協会分類委員会は、現行のNDC第8版を改訂し、第9版の基本案のとりまとめを検討している。この改訂に際し、NDCの論理構造への批判や、実際の出版物の動向に即した項目の展開の在り方や新しい分類番号の新設を求める声等、NDCについてさまざまな議論がだされ、7類つまり芸術の部に関しても、改訂の試案や問題点の指摘がなされている<sup>3)</sup>。コンピュータによる書誌データベース時代を迎えて、ますます主題検索の標準ツールとして、その論理的構造性が重要視されている

NDCであるが、反面あまりに大規模な改訂は、その普及率の高さからしても、すでにNDCを導入している現場での混乱を起こしかねないという二律背反を負っている。従って、日本図書館協会分類委員会としては、論理構造の改善のために、現実使用されている分類記号を大幅に訂正するような変更は極力回避する方針である<sup>4)</sup>。

### 所蔵資料の主題分野と分類法

自館の学芸員だけでなく、各層の一般的な利用者に奉仕することを主たる目的としている一般公開の美術図書館にとって、その蔵書の主題分野が自館の所蔵作品関連の資料に限らず広範囲にわたることはいうまでもない。そうした図書館が、標準分類法であるNDCを採用するのは不思議なことではない。従って、前述のようにこれからも美術の部門におけるNDCの問題点が討議され、改訂を重ねることにより、NDCが美術資料を分類するにあたって、より実用的な分類法となることを心から期待したい。

ところで専門図書館と呼ばれる、企業や研究所の中にある図書室や資料室では、それぞれの機関の目的に応じて、その蔵書の主題分野が限定されている。ブリヂストン美術館の図書室の例を上げれば、蔵書構築のありかたは、かなり片寄りがあるといえる。基本的には所蔵作品関連の資料が優先的に収集の対象となるので、印象派、後期印象派を中心とした19世紀～20世紀前半の西洋の近代美術と作家に関する文献が蔵書コレクションの基幹である。また展覧会カタログをはじめとして、「灰色文献」と呼ばれる、各美術館・博物館や美術大学などの関連機関が発行するさまざまな刊行物や、オークション・カタログなどの、流通ルートにのらず、一般にはその存在さえ知られていない文献が多く収集されている。つまり、こうした限定的な主題分野の資料と、発行部数が少なく、配布先が限定されている灰色文献(従って必ずしも全国書誌には載らない)を主に扱う図書館にとって、標準的な分類法は蔵書の性格を反映しているとはいえず、少なくとも自館に合わせた改変は必要となる。NDCが「総合分類表であり、多数の部門分類表を系統的に組織した統一的総合体」であり、「部門の配分は平均化されていてAとBに軽重がない」ため、「NDCの部門分類表を専門分類表として使うためには、何らかの改変がなされなければならない」<sup>5)</sup>のである。

ブリヂストン美術館がNDCを離れて、独自の分類法に切り替えることになったのは、標準分類法であるNDCがブリヂストン美術館の蔵書の個性のあり方にうまく適合しているとはいえず、最大の理

由であるが、またここで求められている分類は、書誌分類ではなく、あくまでも書架分類であるということが大きい。

書架分類とは、資料そのものを書架上で主題分野別に分類して配架する(書架に並べる)方法である。資料の並べ方としては、この他に資料の形態別に配架する方法や、受入順に配架する方法がある。しかし、形態別や受入順で並べると、利用者はどこに必要な資料があるかを探すためには必ずカードや冊子体、あるいはコンピュータによる目録の検索によって、資料がある場所を確認しなければならない。例えばカード目録であれば、現物の資料の代わりに書誌情報を記入したカードが、著者名や書名や資料の内容の主題別などと体系的に並べられており、それらを検索することで、自分に必要な資料のありかを確認するという手順を踏む。

書誌分類とは、書架上の図書の配列とは関係なく、書誌を体系的に分類して配列するためのものである。必ずしも自館だけの蔵書を対象としているわけではなく、主題分析の深度を深め、主題の数に応じて項目を細分化し、分類を詳細に展開することで、主題書誌を構成するすべての主題文献に対応しようとするものである。それに対して、書架分類では、あくまでも自館の蔵書が対象となる。分類することによって、書架上に資料が体系的に並べられ、同一の、あるいは類似の主題が書架上に隣接することになるので、利用者は、自分が求める主題分野の資料が並ぶ書架で、直接資料を手にとって、必要なものを選ぶことができるのである。また、求める主題分野は決まっても、求める資料自体がはっきり決まっていない場合、browseする、つまりその主題分野の書架のところを歩きながら資料を拾い読みしていくことによって、求める資料自体を決めることができる。

ブリヂストン美術館では、目録を検索する事によって図書館員が資料の出納をおこなうのではなく、学芸員が直接書架に行き、求める資料を調べている。従って、配架されている資料は、その体系が分かりやすく、そして同一の、あるいは類似の主題がまとまって並べられている書架分類の方が便利であると考えた。NDC もちろん書架分類としての側面を持つものであるが、その体系のあり方や主題の設定のあり方が、ブリヂストン美術館での利用者のアプローチの仕方と一致しているとはいえないのである。以下にその具体的な問題点を述べたい。

## ブリヂストン美術館における NDC 使用時の分類上の問題点

### 1. 外国の作家の伝記、研究評論及び作品集について (NDC 新訂 8 版の712, 723, 732, 740.2)

NDC においては、外国の作家の伝記や研究評論、作品集などは、まずそれぞれの作品の形式(絵画、彫刻、版画等)によって分けられ、その地理区分のもとに収められる。しかし、ブリヂストン美術館が所蔵している作品の作家は、シャガールやマティス、ピカソをはじめとして、絵画だけでなく版画や彫刻、さらには陶器さえも制作している作家が少なくない。例えば、ドガの彫刻の作品集を彫刻のもとに収めるのか、あるいはドガを画家であるとして洋画のフランスの項目に収めるのかは、注記がないのではっきりしない。もし、それぞれの作品の形式のもとに分けられるべきであるとするならば、では、例えば画家であり、また銅版画家、石版画家としてもすぐれていたシャガールの版画集が、シャガールの絵画集やその他の文献と切り離されることが良いことであると書架分類による配架においては考え難い。

しかも、NDC では7類(芸術・美術)のこの項目の場合、地理区分とは国籍である。作品が成立した地域やあるいは流派によって区分されるのであればともかく、国籍で区分することは、積極的な意味がないばかりか、時に困難を伴う。特に20世紀になると亡命した作家や、活躍の場が生地とは異なる作家がかなり現われるからである。また国籍は生地とも同一ではない。従って、どこの国籍をもっているかを調べなければならないが、その国籍と、利用者つまり学芸員が、ある作家について抱いている地域のイメージとは必ずしも一致しないので、図書を探す時には、いちいちその国籍を確認する必要がでてくる。

また、資料の並び方からいえば個々の作家に関する文献は、その国における作品のジャンルの美術史という、異なる主題内容の文献と書架上で混ざり合うことになってしまう。

### 2. 芸術史・美術史について(NDC 新訂 8 版の702)

NDC では、芸術史・美術史においてひとつの項目の中に、様式、時代、地理区分が混在しており、分類の際にそのいずれを優先させるべきかという順位が曖昧である。まず日本芸術史・美術史、東洋芸術史・美術史、西洋芸術史・美術史と、大きく3つの地域の様式に大別されているのだが、番号としてはその上に時代区分があり、そこに個々の時代の様式が列挙されている。しかもそれはロマネスクやルネサンス、バロックのように西洋芸術史・美術史の中の個々の様式である。番号が上であるの

で、時代区分が優先されていると見なさざるを得ないが、すると西洋美術の通史は個々の時代の様式の下にくるといふ論理的矛盾が起こっている。また西洋芸術史・美術史の下には各地域での様式が展開されているが、様式、時代、地域の中のどれを分類の際に優先させるべきかという明確な指示がないために、同じ様な資料をある時には時代で分類し、また別の時には地域の下に収めるということが起こりかねない。

また、NDCは標準分類法であるので、美術史においては19世紀と20世紀の美術は同じひとつの項目(702.06)になっている。また、洋画史(723)においても、近世(ルネサンスから印象主義まで、723.05)と20世紀(723.06)というふたつの項目しかない。ブリヂストン美術館の蔵書構成では、所蔵作品関連の資料が中心となるため、当然のことながら印象主義やポスト印象主義、パルビゾン派、ナビ派、フォーヴィスム、キュビズムといった主題の図書が非常に多い。従って19世紀、20世紀のところは様式や美術運動や画派といった特定の主題での項目を細分化する必要があった。

### 3. 材料・技法について(NDC新訂8版の711, 724, 731, 742, 743, 744, 752.3, 756.1)

NDCでは、材料・技法は彫刻や絵画など、それぞれの作品の形式の下に分けられている。また、修復や保存に関しては、彫刻と絵画は材料・技法の下にあるが、版画や工芸にはその項目も無い。

美術館では、作品制作のための技法研究としてではなく、むしろ美術作品の修復や保存のために材料・技法に関する文献を必要とするのではないだろうか。修復・保存の専門書は、日本ではまだ余り多く出版されていないが、ブリヂストン美術館では海外で出版された文献を購入している。その様な専門書では、いろいろな作品の形式や材料にまたがっての修復・保存技術が述べられていることが多い。従って、それぞれの作品の形式の下ではなく、上位概念として修復・保存の項目が必要となる。また、最近ではX線や赤外線などを使っての古文化財や美術作品の科学的調査も始まっている。そうした資料は美術館や博物館ではこれから増えていくのではないだろうか。

### 4. その他

ブリヂストン美術館の所蔵作品は、林忠正コレクション、松方コレクション、福島コレクション、Hansenコレクションなどの蒐集家のコレクションを背景としている。作品の来歴などを調査・研究する時には、こうしたコレクションやコレクターに関する資料を調べることに

なる。また、蒐集家が集めた美術作品のコレクションは、必ずしも現在どこかの美術館や博物館に所蔵されているとは限らない。林忠正のコレクションのように、すでに散逸してしまったコレクションもある。NDCには美術商や画商という項目はあるが、コレクター、パトロン、コレクションについての項目がない。これはブリヂストン美術館にとっては新設したい項目であった。

NDCにおいては、絵画材料・技法の項目で、題材別画法の分類が詳細に展開されている(724)。しかし、イコノロジーやイコノグラフィーといった主題を入れる項目がない。ブリヂストン美術館にとっては、作品のテーマやモチーフは、絵画材料・技法としてではなく、むしろ作品研究の項目として必要である。尚、NDCは基本的にはデュイ十進分類法(DDC)にならって構成されているが、そのDDCには、704.9にイコノグラフィーという項目が設けられており、作品の主題別に細分化されている<sup>6)</sup>。

NDCには、9類(文学)においては英米文学に文学者という項目がある(930.2)のだが、7類では美術評論家や美術研究者についての項目がない。

DDCでは建築は芸術の部門に収められているが、NDCにおいては、建築は建設工学とともに、5類(技術)の項目の下に位置づけられている(520)。ブリヂストン美術館としては建築は芸術の部門に収めたい。

簡単ではあるが、以上がブリヂストン美術館においてNDCを使用する場合の分類上の問題点である。それでは、以下にブリヂストン美術館の分類法の各項目について説明したい。

## ブリヂストン美術館分類法

### 総記について

- 書誌や年表、名簿などは原則として、その出版形式によって03の各項目に分類するが、事典や辞典の中で、特定の主題を扱っているものについては、その主題のところに収め、ラベルにR(参考図書)のマークを入れる。
- 逐次刊行物のうち、年鑑は05とする。雑誌は、タイトルごとに、雑誌リストによる管理とする。
- 美術館、博物館、美術団体、学会等の団体が発行する刊行物は06に収め、図書記号部分は著者記号ではなく、美術館、博物館(M・G・D)コード、大学(U)コード、美術団体(A)コード、学会やその他の団体(S)コードを用いる。ただし館報、年報、紀要類は雑誌と同じ扱いとする。

- 所蔵品目録は06.8に収める。
- ある特定の美術館や博物館が所蔵する作品のみを集めた展覧会のカタログは、その所蔵館の所蔵品目録として、06.8に収める。
- コレクション展の展覧会カタログは、そのコレクションを所蔵している美術館・博物館のところに所蔵品目録として収める。ただし、美術館や博物館の所蔵でないものは、62のコレクションのところに収める。
- 展覧会カタログは、06.9に収める。ただし、特定の作家の展覧会のものは作家の下に、また展覧会の主題がはっきり特定されているものについては、図書としてそれぞれの主題の下に収める。
- 美術全集のうち、各作家で個別になるものは、単一の図書として処理し、それぞれの作家研究の下に収める。

### 芸術. 美術一般

- NDC では701(芸術理論、美学)と704(論文・講演集、美術評論、雑著)に分かれていたものを、ひとつにまとめる。
- 美術研究者、美術評論家の項目を新設し、その著作全集と美術研究者や美術評論家に関する伝記や研究評論はここに収める。ただし作家に関する評論や、作家の書いた随筆などは、それぞれの作家研究の下に収める。
- 美術以外の音楽や演劇等もここに収める。

### 美術史

- 世界美術史のように、特定の時代、地域に限定されないものは20に収める。西洋の各地域の通史、時代をこえたもの、諸時代にまたがるものも20に収め、地理区分表による記号を後に続けて地理区分する。
- 西洋美術の各時代で特定されているものは21～26までに収める。
- 西洋と日本以外の地域の美術史については、28に収め地理区分するが、時代では区分しない。
- 日本美術史は29に収める。
- 西洋美術史の19世紀と20世紀においては、彫刻や版画といった作品の形式よりも、様式や美術運動、画派などの特定の主題が優先し、例えば未来派の絵画と版画は同じ26.05に収める。

### 作家

- 作家は地理区分しない。またそれぞれの作品の形式でも分けない。
- 一冊の図書の中に作家が複数ある場合は、5名までであれば、1.ブリヂストン美術館の所蔵作品の作家 2.書名に最初に出てくる作家 3.書名に作家名が出

ない場合は主に主題となっている作家の順で作家を決定し、その作家の下に収める。また、1の作家が複数の場合は2、3の順で作家を決定する。その他の作家は、件名に作家名を出し、検索の時にアクセスできるようにする。

- 一冊の図書の中で作家が6名以上の場合は30の項目に収める。
- 資料の種類としては、図書、展覧会カタログ、その作家の単独のものであれば所蔵品目録も作家の下に収める。美術全集は作家による分割が可能であれば、分割して単行単位でそれぞれの作家の下に収める。
- 図書記号部分は著者ではなく、作家名とする。同じ作家記号が2つ以上になった時には、主な作家1名を残し、2番目の作家からは作家記号のすぐ後にファーストネームのローマ字の頭文字を付していくことによって個別化させる。
- 補助記号は以下のようにする。
  - 図書は受入順番号を入れる。
  - 展覧会カタログ、所蔵品目録は、カタログの発行年を入れる。

### 作品の主題. モティーフ

- イコノロジーやイコノグラフィーに関するものは40に収める。
  - 複数の主題を扱っているものは40に収める。
- [この項目の細分化については DDC 第20版の Iconography のうち 704.9-704.949と753-758を参考にした。]

### 材料. 技術. 修復. 保存

- NDC では、材料・技法は彫刻や版画などのそれぞれの作品の形式の下に分けられているが、ブリヂストン美術館の分類法ではこれらを分けず、一つの項目とする。
- それぞれの作品の形式や素材にまたがる技法・材料、及び特殊な技法・材料については、すべて50に収める。
- 修復や保存に関するものは50に収める。また美術作品の梱包や輸送に関するものもここに収める。
- 古文化財や美術作品のX線や赤外線を使つての科学的調査は50に収める。
- 特定の作家の作品における技法や科学的調査については、それぞれの作家の下に収める。

### 美術市場. 展覧会. サロン

- 美術市場やオークション、価格に関するものは60に収める。また展覧会史やサロンに関するものも60に収めるが、この場合のサロンは展覧会を指す。個人のサロ

- ンやパトロン、コレクターについては62に収める。
- 万国博覧会に関する資料はすべて61に収める。
  - コレクター、美術商、パトロンの評伝は62に収める。また彼らが収集したコレクションについてもここに収める。
  - ただし、そのコレクションが美術館、博物館の所蔵品であり、美術館や博物館としての所蔵品目録となっている場合はそれぞれの美術館、博物館の所蔵品目録として06.8に収める。
  - ブリヂストン美術館の所蔵作品に関係する松方、福島、林、Hansen のコレクションとその関連の資料はすべて63に収める。展覧会のカタログや人物の評伝もこれに含まれる。

#### 美術と他の主題との関係

- 美術と他の主題とを扱ったものはここに収める。
- 細分化はしない。必要がでてくれば検討する。

#### 美術以外の主題

- 美術以外の主題はここに収める。
- 書誌、年表、語学辞典などは、原則として出版形式によって03に収めるが、語学以外の辞典、事典については特定の主題を扱っているものは、それぞれの主題の下に収める。

#### 地理区分表

- 地理区分そのものはあくまでも補助的に使用されるものである。
- 西洋の地域の地理区分の順序はブリヂストン美術館の蔵書コレクションの構成上、使用頻度の高い地理順とした。

#### 終わりに

この分類法は、あくまでもブリヂストン美術館の蔵書構成に合わせて作成したものである。従って、同じ美術館の図書室であっても、蔵書コレクションの性格が似ていなければ、この分類法を適用できるとは考えていない。これはあくまでも独自分類法であることを強調したい。

コンピュータの普及により、書誌情報の検索は、カードからデータベースの時代へと変化してきた。現在大学図書館や公共図書館ではOPAC<sup>7)</sup>により、利用者が図書館員の手を経ることなく、直接端末を使って目録の検索をするようになった。OPACによる検索では、カード目録による検索と比べて、アクセスポイントが増え、また複数のアクセスポイントから複合的な検索ができるよう

になった。こうした時代では、個人的には分類は、自館の蔵書だけを考えた場合、主題検索のためというより、資料をどのようにまとめて配架するかという書架分類としての機能を優先させて良いのではないかと考えている。

しかし、汎用性や、将来の書誌情報の共有化において、書誌分類法としてのNDCの役割ということを見ると、NDCから完全に離れてしまうことには多少不安があった。そこで、分類番号は独自のものを使用するが、書誌データのひとつとして、NDCの分類番号も必ず付けることにした。ある意味では二重の手間ではあるが、最初のところで述べたように、ブリヂストン美術館で求められているのが書架分類であるため、利用者にとっての利便性を考えた結果である。

最後に、この分類法を作成するにあたっては、ミュンヘンの中央美術史研究所の分類法を基にしたといわれる、国立西洋美術館の分類法を参考にさせていただいた。

また図書館情報大学の黒岩高明先生から、細部にわたるまでいろいろご教示いただき、国立西洋美術館の波多野宏之氏、美術ドキュメンタリストの中島理壽氏、東京国立近代美術館の水谷長志氏、国立国会図書館図書研究所の柳与志夫氏からも、貴重なご助言をいただいた。美術研究者の千速敏男氏からは、資料としてミュンヘンの中央美術史研究所の分類記号一覧と、千速氏による日本語訳をいただいた。皆様に心からお礼申し上げます。

(なかむらせつこ ブリヂストン美術館)

---

## 註

- 1) 高階秀爾, 平山郁夫「特別対談 世界に向けた美術情報の発信基地を一急務となった本格的美術情報センターの設立」『新美術新聞』No.591(1991.1.1・11)
- 2) 石山洋「日本十進分類法第9版への発進—JLA分類委員会の改訂方針」『図書館雑誌』vol.80, no.5, p.282-283(1986.5)
- 3) NDC第9版に向けての改訂方針や各類ごとの試案, その問題点の指摘等は『図書館雑誌』や『図書館界』を中心として多くの文献が発表されているが, ここでは誌面の都合上, 芸術の部に関するもののみ紹介させて載きたい。  
JLA分類委員会「日本十進分類法第9版試案の概要—その3『芸術』の部」『図書館雑誌』vol.83, no.10, p.659-662(1989.10)  
三浦整「NDC9版を考える(2)—7類(芸術)の問題点」『図書館界』vol.44, no.5, p.230-235(1993.1)  
また, アート・ドキュメンテーション研究会の整理ワーキンググループは, NDCの改訂案および現行8版での美術分野における問題点の検討を開始し, その中間発表として東京国立博物館資料部の住広昭子氏により「美術分野におけるNDC(日本十進分類法)の問題点」がアート・ドキュメンテーション研究会の第14回研究会において発表された。その研究会の内容については, 後藤純子「第14回研究会 報告」『アート・ドキュメンテーション通信』no.18, p.19-20(1993.7.25)を参照されたい。
- 4) 石山洋「“NDC9”検討会の概要」『図書館雑誌』vol.86, no.11, p.809-810(1992.11)
- 5) もり・きよし編『NDCのつかい方』(図書館の仕事9) 日本図書館協会 1966
- 6) Dewey, Melvil, *Dewey Decimal Classification and Relative Index*. Ed. by John P. Comaromi et al. 20th ed. Albany, New York: Forest Press, 1989.  
DDCでは704.9以外にも, 作品の形式ごとに Iconography という項目が設けられている。例えば 731.8(Plastic arts; Sculpture), 743.9(Drawing and decorative arts), 753-758(Painting and paintings), 769.4(Graphic art; Printmaking and prints)の様に。
- 7) Online Public Access Catalog 利用者自身がコンピュータでデータベース化された目録を検索できる書誌・目録検索システム。

---

## ブリヂストン美術館図書資料分類表

### 00 総記

.7 情報科学

### 01 図書館

### 02 図書, 出版

.9 印刷

### 03 書誌, 辞典, 便覧, 名簿など

.1 書誌

.2 年表

.3 辞書

.4 用語

.5 名簿[ダイレクトリ] \*人名録を含む

.6 便覧

.8 地図

### 05 年鑑

### 06 美術館, 博物館, 美術団体, 学会等団体 \*保存, 修復関連→50

.1 博物館行財政・法令

.2 博物館建築・設備

.3 博物館職員

.4 資料の収集, 整理

.6 資料の展示, 利用, 宣伝

.8 所蔵品目録

.9 展覧会カタログ

### 07 研究, 指導法, 芸術教育

.8 美術館教育

.9 美術鑑賞法, 美術批評法

### 08 美術全集

### 09 芸術政策, 文化財

### 10 芸術, 美術一般

.4 随筆, 雑著

.8 論文・講演集, シンポジウム

### 11 芸術理論, 美学, 評論

### 13 芸術社会学

### 14 芸術心理学

### 16 美術研究者, 美術評論家



- 
- .05 ポスト印象主義, 新印象主義, 綜合主義, ポン=タヴェン派
  - .07 世紀末, 象徴主義, アール・ヌーヴォー, ナビ派, ベル・エポック
  - .09 その他
  - .1 19世紀の彫刻
  - .2     〃     絵画. 素描
  - .3     〃     版画. ポスター
  - .4     〃     写真
  - .5     〃     工芸
  - .6     〃     建築

## 26 西洋の20世紀

- .01 フォーヴィスム
- .02 キュビスム
- .03 ナイーフ
- .04 表現主義
- .05 未来派, ダダ, シュルレアリスム
- .07 エコール・ド・パリ
- .08 抽象表現主義, コブラ, アンフォルメル
- .09 その他
- .1 20世紀の彫刻
- .2     〃     絵画. 素描
- .3     〃     版画. ポスター
- .4     〃     写真
- .5     〃     工芸
- .6     〃     建築

## 28 西洋, 日本以外の美術史

- .1 西洋, 日本以外の彫刻
- .2     〃     絵画. 素描
- .3     〃     版画. ポスター
- .4     〃     写真
- .5     〃     工芸
- .6     〃     建築

## 29 日本美術史

- .01 原始時代
- .02 古代
- .03 中世
- .05 近世: 江戸時代
- .06 近・現代: 明治, 大正, 昭和, 平成
- .08 古社寺     \*ここには, 個々の古社寺を中心とした芸術, 美術を収める
- .09 日本各地   \*日本地理区分はしない
- .1  日本の彫刻
- .2  日本の絵画. 素描
- .21 日本画
- .23 日本の洋画

- 
- .3 版画. ポスター
  - .4 写真
  - .5 工芸
  - .6 建築

### 30 作家

#### 31 外国の作家

- \* ここには、個人の伝記、研究評論、作品集、カタログレゾネ、著作、個人の作品を集めた展覧会カタログ、所蔵・出陳目録を収める
- \* 詳しくは、分類適用細目を参照

#### 32 日本の作家

- \* ここには、個人の伝記、研究評論、作品集、カタログレゾネ、著作、個人の作品を集めた展覧会カタログ、所蔵・出陳目録を収める
- \* 詳しくは、分類適用細目を参照

### 40 作品の主題. モティーフ: イコノグラフィー. イコノロジー

#### 41 神話. 伝説. アレゴリー. シンボリズム. 幻想

#### 42 宗教芸術. 宗教美術

- .1 キリスト教芸術
- .2 仏教芸術

#### 43 人物: 肖像, 女性, ヌード, 身体の部位, 特定のモデル

#### 44 ジャンルペインティング. 風俗画

#### 45 動・植物

#### 46 静物

#### 47 歴史. 戦争 \* 神話. 伝説の中の戦争→41

#### 48 地理. 風景. 海景. 建物

#### 49 その他の主題

### 50 材料. 技術. 修復. 保存

#### 51 彫刻

#### 52 絵画. 素描

#### 53 版画. ポスター

#### 54 写真

#### 55 工芸

#### 56 建築

#### 58 贋造. 鑑定. 模写. 複製

#### 59 額縁. 表装

### 60 美術市場. 展覧会. サロン \* 展覧会カタログ→06.9

#### 61 万国博覧会

#### 62 コレクター. 美術商. パトロン

#### 63 特殊コレクション

- \* ここには松方コレクション、福島コレクション、林コレクション、Hansen Collection 等ブリヂストン美術館に関連のコレクションを収める

### 80 美術と他の主題との関係

---

---

90 美術以外の主題

91 哲学, 宗教

92 歴史, 地理

.1 日本の歴史, 地理

93 社会科学

94 自然科学, 医学

95 技術, 工学, 工業

96 産業

98 言語

99 文学

地理区分表

A 西洋

B フランス

C イギリス

D ドイツ

E オーストリア

F スイス

G イタリア

H スペイン, ポルトガル

J オランダ, ベルギー

K ロシア, 旧ソヴィエト連邦諸国

M 北欧

N 東欧, バルカン

R アフリカ

S 北アメリカ

T 南アメリカ

U オセアニア, 南太平洋諸島

V 中東, アラブ諸国

W アジア

Y 日本